

山の上の女よ、春子よ、久子よ、M太郎よ。

僕は淫猥な歌も唄つた。

巡査が休憩室の二階遊りで、藤八拳をやつてゐる。

日が暮れる。

手水鉢をかへる音がする。朝になつたのだ。

聴て僕の義母が下駄の音をセメントの土間に響かせてやつて来る。

提灯をかさす。

僕は握りめしを食つてお湯をのむ。すると昂奮する。

義母を下ナリ付ける。

「辻潤が春子を連れて来て、宿屋に泊つてゐるだらう」と僕は言つたりする。

僕の頭蓋骨に、穴が明いたのかも知れない。

僕は何故此處から早く出して呉れないかと怒るのだ。

僕は段々握りめし三個では空腹になつて来た。